

せんだんの実のように

竹下 哲

ここに落在して

私がこの三月まで勤務していた教育センターは、大村公園の只中にあります。四百年前のお城の跡で、大木がうっそうと繁り合っています。その中に、一本のせんだんの木があります。青空に亭々と聳^{そび}える大木です。冬になると黄色い実をつけます。空いっぱいに豆をばらまいたような風情です。冬の終わりごろ、その実がパラパラと落ちてきます。

その有様を見ていると、日当たりのいい、地味の肥えた処に落ちるのもあれば、薄暗い茂みの中に落ちるのもあります。石ころだらけの、痩せた土地に落ちるのもあります。でも、どの実も平然としてそこにあります。デンと落着いています。落在——ということばを、その時私はしみじみと思いました。

そして、春になると、それぞれの実が芽を出し、茎を伸ばし、葉をひろげ、やがて薄紫の花をつけます。どの実もいっしょうけんめいです。もしその土地が痩せているならば、茎を短く

し、花の数を減らしてでも、精いっぱいに生きようとしています。そのけなげさ、そのいじらしさ——見ていて涙がにじんできます。頭が下がります。

ひるがえって、私たちの現実を顧みると、ややもすれば私たちは、他人をうらやんだり、ねたんだり、あるいは自分の能力や境遇を悲観したりして、一日一日をむなしく過ごしてしまいがちです。一刻一刻に心をこめることをしないで、いい加減に片づけてしまいがちです。

九条武子夫人の歌に、——見ずや君明日は散りなむ花だにも力の限りひとときを咲く——、というのがあります。明日は散ってしまうであろう花でさえも、ひとときを力の限り咲いているのです。私たちも、この花のように、そして、あのせんだんの実のように、それぞれの置かれた境遇に「落在」して、精いっぱいに「自分の花」を咲かせなければならない、と切に思います。

今をいきいきと

諸君は「大いなる可能性」を秘めて、「今」を生きているのです。過去を生きているわけで

もなければ、未来を生きているわけでもありません。過去を背負い、未来をはらんだ今を生きているのです。その今を、いきいきと生きることが肝要です。

ところが往々にして、私たちは、いたずらに過去を夢見たり、「山のあなたの空遠く」未来を夢見たりするばかりで、今をいきいきと生きようとはしません。あるいは、今はどうもやる気が出ない、乗り気になれないなどと言って、今をぼんやりと過ごしてしまいます。

次の文は、ある高校生とカウンセラーとの対話です。

（生徒）

自分がいやになる。気を散らさないで一心にやりたいのですが、ついマンガを読んだり、テレビを見たり……。期末試験まであと十五日。

（カウンセラー）

まちがいです。雑念をなくそうと思っても、なくなるものではありません。君は精神を統一してからやろう、と考えているんじゃないかもしれませんか。それは「絵にかいたボタモチ」です。雑念があるのが普通の人です。雑念があるままに、しっかりやるしか手がないのです。

そのとおりですね。雑念があるままに、机の前に坐るのです。心が乱れたままで、ともかく本を開くのです。そのうち、気持ちが落ち着いてきます。いつの間にか読書に没頭している自分に気づくのです。それが今を生きるということです。

学校を取り巻いている楠の若葉が、五月の空にキラキラ輝いています。太陽の光に照り映えています。雨が降れば降ったで、雨に濡れてあざやかな緑の色を放ちます。楠の若葉は、今をいきいきと生きているのです。

諸君が——進学するにしても、就職するにしても——、今をいきいきと生きてくださるよう願ってやみません。過去を背負い、未来をはらんだ今を、心をこめて生きてくださるよう祈ってやみません。

竹下哲『いのちのうた』（長崎県教育研究協議会）より